４　企業等とは連携しない実践型学習における取組

４．企業等とは連携しない実践型学習における取組

・・・１年次生クラスの取組

１．社会人基礎力の育成手法について

（1）教育プログラムの設計

①教育目標・位置づけ

本事業は、本学の建学の精神に則り、事業全体の目標を掲げ、その達成を一挙に図ろうとはせず、1～3 年次生の特性に応じて目標を二段階にブレークダウンしており、このプログラムは、そのうちの第一段階のものにあたる。

◇第一段階（1 年次生対象：「PBL 実践Ⅰ」）の目標

明確なキャリア意識を持ち、精神的内面から支えられた社会人基礎力を自ら高め（12 要素のうち 6 要素以上の事後他者評価が社会人基礎力レベル評価基準のレベル 2 以上)、キャリア意識に沿った学習が自主的にできるようになる。

本事業のベースとなった「課題解決力実践」（正規授業科目）はシラバスに明確に、「大学で学ぶ専門知識と社会人基礎力（アクション・シンキング・チームワーク）とを相互に関連させながらそれらをスパイラル的に高め、強化する」ことをめざすことを記載しているが、今回は正規科目ではなく教育プログラムとしての認定になる。

②プログラム形態

企業からの課題に直接取組まない（職業観と社会の仕組みとフィールドワークの前準備）1 年次生の PBL 型学習から、段階的に２・３年次生の企業からの課題に取組む実践的 PBL 型学習を組み合わせた二段階方式のプログラム体系で行う。

③プログラム構成

日程	授業中の活動（または授業外の自主活動）	育成する能力要素
10 月 16 日	オリエンテーション（授業のアウトライン）	課題発見力、計画力、柔軟性、情況把握力
10 月 23 日	インタビュー体験 ｷｬﾘｱﾜｰｸ「バリューカードと傾聴練習」	創造力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性
10 月 30 日	キャリアインタビュー　チーム分け インタビュー企画書作成第 1 弾	主体性、計画力、規律性
11 月 4 日	活動記録シート記入 インターネットで職業探索 キャリアインタビューの進め方 インタビュー企画書作成第 2 弾 発表とアドバイス	課題発見力、計画力、発信力、傾聴力、規律性
11 月 6 日	キャリアインタビュー企画案発表	主体性、計画力、発信力、傾聴力、規律性
11 月 13 日	パワーポイント演習 キャリアインタビュー企画案発表	主体性、情況把握力、発信力、傾聴力、規律性
11 月中旬～ 12 月上旬	各自で自主的にキャリアインタビュー実施	主体性、働きかけ力、実行力、計画力、発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
11 月 20 日	キャリアインタビュー進捗状況発表	主体性、情況把握力、発信力、傾聴力、規律性
11 月 27 日	中間プレゼンテーション プレゼンテーション振り返り	主体性、実行力、計画力、発信力、傾聴力、情況把握力、規律性、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
12 月 4 日	キャリアインタビュー進捗状況発表	主体性、情況把握力、発信力、傾聴力、規律性
12 月 11 日	ビジネスマナーとプレゼンテーション講習	発信力、傾聴力、規律性
12 月 18 日	最終報告会発表についてディスカッション	主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
1 月 8 日	最終報告会発表準備	主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
1 月 15 日	最終報告会	主体性、実行力、創造力、発信力、情況把握力、規律性、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力

④チーム編成

○学生の募集方法

１年次生から３年次生の学生対象に履修ガイダンスにて告知し、募集説明会を２日間行い、このプログラムの狙いと仕組み、授業日程を説明し募集活動を行った。１年次生は３年次までの計画とプログラム内容の説明と面談を行い、受講意志の確認をした。

○参加学生の所属（学部・学科）及び人数

学部	１年次生
経済学部	４名
経営学部	４名
法学部	１名
計	９名

○メンバー構成、役割分担等

ＰＢＬ実践Ｉチーム：担当教員１名、学生９名（１年次生)。授業運営に学生も主体的に関わった。

(2) プログラムの運用

①それぞれの授業や活動等における工夫

ⅰ)授業を進めるにあたって（基礎づくり）

・クラス内での約束事を共有

下記｢約束事｣を毎回の授業レジュメに必ず印刷し、常に意識できるようにした。

1．参加メンバーが**主体的に**知恵を出し合って進めます。
2．プロジェクトを進めるにあたっては全員が何らかの**役割を担い**ます。
3．授業への参加、メンバー同士の打ち合わせ、インタビュー訪問など
　すべての行動において**時間を厳守**します。
　特に授業は開始５分前（通常８：55 に集合のこと）
4．すべての授業に**パーフェクトに出席**します。
5．**全員が参加**できるよう互いに配慮します。
6．困難なことが起こっても**9人で解決**します。

・“遅刻・欠席ゼロプロジェクト”の立ち上げ

今年度の時間割では朝９時からの１限目の授業となったため、まずは授業に遅れない、欠席をしないということが学生にとっては大きな課題となった。

そこで、単に「遅刻や欠席をしないこと」を教員から押し付けるのではなく、「どうすれば遅刻、欠席をゼロにすることができるのか？」、という課題を与え、その方策を学生自身に話し合わせた。この際の留意点は「気合を入れる」「忘れないようにする」といった単なる精神論ではなく、具体的に行動できるレベルにまで落とし込むこと、とした。

結果的に学生は「遅刻欠席ゼロ三箇条」なるものを取り決め、自らの決めたルールとして半年間常に時間について意識し続けることができた。

ⅱ)具体的なスキルの習得

・パワーポイント演習

1 年次段階ではまだプレゼンテーションツール（ex.PowerPoint）を触ったこともない学生もいるため、今後増えるプレゼンテーション機会に備え、「パワーポイント演習」を 1 講義設けた。

学生 3 人からなる１つのチームに授業の前日までに架空のプレゼンテーション資料を渡し、当日までにそれと同じものを作成できるようになるよう指示。当日は 3 人がリーダーとなり、クラスの他のメンバーに操作方法を教授した。このことにより教員からの一方通行的な演習ではなく、学生同士が主体的に教えあうことで作業に集中することができたようである。

・プレゼンテーショントレーニング

プレゼンテーションをする際、資料の作成のみが意識されがちとなり、当日のパフォーマンスにまで手が回らなくなるため、最終報告会を前に、元アナウンサーであるプロの発声トレーナーを招き、トレーニングを実施した。

当日は、歩き方、立ち姿勢、声の出し方・大きさ、視線の配り方、話すスピード、などについて細かくアドバイスをいただき、またプレゼンテーション全

体の流れについてもどこを強調したいのか、伝えたいことは何か、といった観点からスライド作成についてアドバイスもいただいた。

ⅲ)キャリアインタビューの実施

・インタビュー体験

学生の中から一人出てきてもらい、教員が2回インタビューをする。1回目は無表情で一問一答形式、2回目は相手の目をしっかり見て一つの答えをさらに掘り下げて実施し、その違いを観察して気づいた点を共有。

また、「相手の目をしっかり見る」「笑顔を忘れない」「声も明るく」「相手に共感するあいづちを打つ」「相手のいいところを探そうとする」「相手を大好きになってみる」などインタビューのポイントを押さえる。

・インタビュー掘り下げのコツ

５Ｗ１Ｈを活用して、一つの質問からどんどん掘り下げていく練習をした。

・インターネット職業探索

インタビューの企画に当たって、まず社会にどんな職業があるのか、というイメージを持つために、インターネットの職業探索サイトを利用した。

『ＪＯＢ　ＪＯＢ　ＷＯＲＬＤ』(ｼﾞｮﾌﾞｼﾞｮﾌﾞﾜｰﾙﾄﾞ)

http：//www.shigotokan.ehdo.go.jp/jjw/top.html

・インタビュー企画書作成

設問に沿って記入していくと完成する「企画書シート」を配付

例）インタビューしたい人は誰か？**〔Who？〕**

聞きたい内容と何故それを聞きたいか？**〔What？　Why？〕**

その人にアプローチする方法は？**〔How？　Where？〕**

いつまでに誰が何をするか？**〔When？　Who？　What？〕**

・キャリアインタビューの進め方

キャリアインタビューでは、実際のインタビュー以外に次のようなプロセスを含んでいる。

イ）インタビュー先へのアポイント

ロ）依頼状の作成、送付

ハ）質問内容の整理

ニ）名刺交換

ホ）終了後、お礼状の作成、送付

ヘ）レポート作成

特に、電話でのアポイントや依頼状、お礼状の作成といった作業は１年次生にとってはまだ慣れない「大人」の領域であるため、きちんと見本を示し実際のビジネスシーンさながらの場面を体験させることで社会人としての自覚を促すこ

とにもつながる。

・キャリアインタビュー進捗状況発表

主に、アポイントの取得状況とインタビュー後の感想発表を柱に、学生が司会者となって進めた。アポイントがうまく取れない学生に対しては、他のメンバーや教員からアプローチ先、その方法についてのアドバイスや断られた時の次につなげる声かけ（励まし）などを行った。また、インタビュー後の感想発表では、聞き手の学生はこれまでに培った質問力を使って、「そのときどんな気持ちだったか」「将来に向けて始めようと思ったことはあるか」など発表をどんどん掘り下げていった。

進捗状況がひと目でわかるよう状況をまとめた表を活用。

②支援員（教職員等）によるファシリテート

ⅰ)クラス内コミュニケーションの活性化

・ニックネーム

最初の授業で人から呼んでもらいたいニックネームを各自に考えさせ、授業内ではその名前で呼び合うこととした。

ニックネームの命名は様々なワークショップで用いられるが、短時間でコミュニティ内の空気を打ち解けさせることのできる、効果的な手法である。

・アイスブレーキングの持ち回り

アイスブレーキングは授業の冒頭5分程度で毎回簡単なゲームなどをして場の緊張をほぐしたり、脳と身体を活性化したりすることが目的である。

毎回その日の担当学生がリードする形式で実施した。「場をほぐす」という本来の効果に加え、学生が自らクラスをリードしたり、予めゲームをシミュレーションして当日に備える、などの要素も含んでいる。

参考『楽しいアイスブレーキングゲーム集』 三浦一朗 著 （財）日本レクリエーション協会 発行

・バリューカードと傾聴練習

「バリューカード」とは、人の持つ価値観（バリュー）を15種類に分類し、1枚のカードに1つの価値観を記載したもの（写真参照）で、この15枚1セットになったカードをひとりずつに配付。学生はこれを自分が重要だと思う順番に並べる過程で自分の価値観についての新たな発見を得ることになるが、さらに、二人一組になって、互いのカードの順番についてその理由や思いを聴きあう作業をした。

価値観とは人それぞれにとって大切なものであり、自分の価値観を大切にするのと同様、相手の価値観も大切に受け止めるつもりで互いの話しを聴くようしっかり伝える。

ⅱ)モチベーション維持

・プログラム全体のゴールを共有

本プログラムのゴールを以下のように設定し、共有した。

「大学を卒業したあと、どう生きたいのか、どんな仕事をしていきたいのか、についてのイメージを持ち、それを元に充実した大学生活を送る。」

・ゴールセッティングシート

また毎回、ゴールセッティングシートを利用して、社会人基礎力12要素のうち、意識して行動する要素を授業時間内に記入し、授業終了時に達成度の確認を行った。

・ほめる、承認する

これまでほめられた経験が少ない学生は、自己効力感に乏しく、物事を最後までやりきった達成感を味わうことが少ないため、途中で投げ出してしまう傾向にある。本プログラムでは、小さなことでもできたことやうまくいったことは積極的にほめ、「できた」という経験を積み重ねられるよう配慮した。ポイントはできるだけ具体的にほめること。例えば、単に「レポートがよく書けていた」ではなく、「インタビューのやりとりから〇〇くんが将来のイメージを持てたことがよく伝わってきた」のように何ができたのかを明確に指摘する。

このほめるという行為は教員から学生へ一方通行的に行うだけでなく、例えば発表の時などに拍手を促したり、どこがよかったかをコメントさせるなど、学生間でも互いをほめあうという習慣がつくように意識した。

・学生による授業運営

プログラムが中盤に差し掛かった 11 月頃からは、教員が学生をファシリテートする、という形態から学生自身が授業を仕切る時間も作り出し、モチベーションの維持を図った。具体的にはパワーポイントの演習の講師役を 3 人 1 組になった学生に任せたり、インタビューの進捗状況発表の進行を任せ、振り返りシートの中には、「先生のようなことができて面白かった」という意見も見られた。

③支援員の育成（指導）力向上のための工夫

ーマインドマップ事前研修（担当教員・スタッフ向け）2008 年 10 月 2 日

学生の発散型思考を促すために導入した「マインドマップ」を各クラス内で指導するにあたって担当教員・スタッフを対象に事前研修を実施

【プログラム内容】

- マインドマップの概念説明
- その効果
- 必要となる準備物
- 描くときのポイント
- 応用範囲
- 実践（実際に描いてみる）
- 振り返り（プログラム化する際の留意点の洗い出し）

(3) 育成手法の反省事項と改善策

ーキャリアインタビュー実施時期について

これまで社会との接点がまだ少ない 1 年次生を対象としていることもあり、インタビューの趣旨の確認やインタビューの事前練習、関心のある職業に関する情報収集などを比較的時間をかけて行ったが、実際にインタビューをもっと早い時期に行うことで早い段階から社会人の刺激を受けモチベーションアップにもつながったのではないかと思われる。この点について、今後は学生の準備状況をみながらもう少しインタビュー時期の調整を行う必要があろう。

２．社会人基礎力の評価手法について

(1) レベル評価基準

この取組にあっては、社会人基礎力の評価は次の二つの側面からなされた。したがって、測定方法やレベル評価基準は両側面によってそれぞれ異なっている。

①外面的評価：「○○できる。」という見える部分の面接やモニタリングによる評価

この取組のレベル評価基準には、このような評価は初めての経験でもあり、今回は、経済産業省のもの（経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』、28―29 頁。）をそのまま用いた（巻末資料１）。

②内面的評価：「○○できる。」能力を内面から支えている知的・精神的側面の検査による評価

社会人基礎力三つの力のうち「考え抜く力」を内面から支えている知的側面（頭の働かせ方）を CRATTI（適性科学研究センター）で測定し、測定値を偏差値（平均＝50、標準偏差＝10）であらわす。また、社会人基礎力三つの力のうち「前に踏み出す力」と「チームで働く力」とを内面から支えている精神的側面（精神的タフネス）は PC－TAOK（適性科学研究センター）で測定し、測定値を偏差値（平均＝50、標準偏差＝10）であらわす。なお、両検査についてのこれ以上の内容については、企業秘密に触れるため明らかにすることはできない。

(2) 評価実施要領

すでに述べたように、この取組にあっては、社会人基礎力の評価は外面・内面の二つの側面からなされ、実施要領もそれぞれ異なっている。

①外面的評価

ｉ）自己評価

○評価の回数・時期

事前、事中、事後の３回実施された。実施時期については以下の通りである。

・事前自己評価：平成 20 年 10 月 12 日（全 21 講中第２講目）
・事中自己評価：平成 20 年 11 月 20 日（全 21 講中第 13 講目）
・事後自己評価：平成 21 年１月 15 日（全 21 講中第 20 講目）

○学生が自己評価に慣れるために行った工夫

次のような工夫がなされた。自己評価についての学生の戸惑いは見られず、実施された下記の工夫に効果があったものと思われる。

・当初のオリエンテーション時に、社会人基礎力レベル評価基準表（巻末資料１）を配布し、説明を徹底するとともに、クリアファイルに入れて常に持ち歩くことを指示した。
・毎授業時間の開始に当たり社会人基礎力ゴールセッティングシート（巻末資料２－①）を記入させ、授業終了時に振り返り（巻末資料２－②）を行う。

ⅱ）他者評価

○評価者

この取組は４チームで実施されたが、企業とは連携しないこのチームはそのうちの１チームで、１年次生のチームである。

◇企業とは連携しないチーム（１年次生　９名）

評価者はチーム担当者：非常勤（コーオプ教育スタッフ）

○評価の回数・時期

事中、事後の２回実施された。実施時期については以下の通りである。

・事中他者評価：中間報告時

１年次生チーム：平成 20 年 11 月 27 日　全 21 講中第 14 講目

・事後他者評価

１年次生チーム：最終報告会時（平成 21 年 1 月 15 日 全 21 講中第 20 講目）

○評価の方法

チーム担当者による評価は､授業時や授業時外でみられる学生の日常の行動事実を対象にして、モニタリングで実施した。

○評価者の評価力向上のための工夫

社会人基礎力育成･評価に関する情報共有と評価者の評価力向上のために、事前に、全関係者（企業側担当者、チーム担当者、事務局スタッフ、第三者評価委員、社会人基礎力普及推進委員、近畿経済産業局担当メンバー）による全体会議を開催した。その会議で、この取組の概要を説明するとともに、「社会人基礎力育成のための評価システムと実施日程・手順」（巻末資料３）と題し、ファイルに綴じた保存用資料を配布して評価に関する解説をした。

また、チーム担当者は、毎授業終了後、振り返りのミーティングを行い情報共有に努めた。

○適切かつ効率的な評価の実施のための工夫

全 28 名の受講生を４名の担当者で分担し、少人数のチームに分けた。そのため、チーム担当者は、常に、チームの全員を掌握することが可能になった。

②内面的評価

全員を一つの教室に集め、ＣＲＡＴＴＩおよびＰＣ－ＴＡＯＫ（何れも適性科学センター）を実施した。

・事前評価：平成 20 年 10 月 9 日（全 21 講中第 1 講目）　90 分

・事後評価：平成 21 年 1 月 10 日（全 21 講中第 19 講目）　90 分

実施後は、検査用紙を回収し、適性科学センターに郵送した。約 10 日後に、測定結果とその解釈とが返送されてきた。

(3) 成長の記録、評価結果のフィードバック方法

①プログレスシート

○様式

当初は、経済産業省のモデル（経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』、47―48 頁。）に、上記の内面的評価の結果を追加記載する予定でいた。しかし、たとえば、知能指数を本人に明かさないのと同様に、偏差値で表された検査結果は本人に知らせない方がよいと判断した。そこで、内面的評価結果の追加記載を断念した。このようなシートの作成は初めての経験でもあり、今回は、経済産業省のモデルをそのままプログレスシートとして用いることにした（巻末資料４－①②③④）。

○記載の流れ及び記載要領、フィードバックの方法（タイミング・内容）

プログレスシートは受講生のあゆみと成長の記録である。したがって、この取組が終了し、事前・事中・事後評価シートなどすべての記録が揃った段階で、チーム担当者が記載する。各項目の記載内容は以下の通りである（経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』、48 頁。）。

◇プロジェクトの活動内容、目標

事前評価シートにある同じ項目を転載する。

◇自己評価の履歴

事後評価シートに、学生が授業全体を振り返って、自身の成長について記したものを転載する。

◇活用した（学んだ）専門知識やスキル等

事後評価シートの同じ項目を転載する。

◇（チームとしての）活動成果

事後評価シートの同じ項目を転載する。

◇プロジェクトでの役割・担当としての活動

事後評価シートの同じ項目を転載する。

◇他者（教員）評価の履歴

・中間レベル、事後レベルの欄

事中、事後評価シートにある「教員のレベル評価」から転載する。

・具体的行動事実の欄

事中、事後評価シートにある教員のコメントを活用して記載する。

当初、評価シートや活動記録、プログレスシートなどの記録や提出、フィードバックには、本学で稼働している学習支援システム（ＬＭＳ）Moodle を利用する予定であった。しかも、すでに、これらのシートはエクセルのシートとしてシステム上に設置されている。しかし、本年度は、この取組の実施そのものに精力が割かれてしまい、システム操作のための訓練に十分な時間がとれず、次年度を期して、本年度の実施を断念せざるを得なかった。

○プログレスシート活用の可能性とその具体的工夫

エントリーシートに、この取組を受講して終了したことや、その「あゆみと成長の記録」があることを書き、その内容を自己ＰＲなどに活用する。

・面接時にプログレスシートを活用する。

・終了証書を受講生に手渡し、就職活動時にプログレスシートとともに携帯し活用する。

就職活動のみならず、社会人基礎力の学内普及に活用する。たとえば、プログレスシートに記載されている「活用した（学んだ）専門知識やスキル」に関連した科目としてあげられた科目担当者を訪ねて、その科目が如何に役立ったかをプログレスシートを用いて説明する。

○学生が記載に慣れるための工夫

予め、事例を示しておく。今回は初めての試みなので、経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』(28～31 頁）を活用した。

授業開始時にゴールセッティングシート（巻末資料２－①）を配布し、それに、その時間の行動目標を記入する。そして、終了時に振り返り（巻末資料２－②）を行い、その結果をゴールセッティングシートに記入する。上記事例を頭に置いて、これを毎週繰り返すことにより、自己評価にも慣れ、自身の行動を振り返り、文章化する力も向上する。

②評価シート

○様式

このような評価は初めての経験であり、今回は、経済産業省の様式（経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』、44～46 頁。）をそのまま用いることにした（巻末資料５～８）。

○記載の流れ及び記載要領、フィードバックの方法（タイミング・内容）

◇事前評価シート

・事前評価シートを、提出１週間前に、記入方法が例示してある経済産業省の様式（経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』、44 頁。）のコピーを付して学生に配布する。

・学生は、記入方法の例示にしたがって事前評価シートの学生本人記入欄に記入して、１週間後の授業で担当者に手渡す。

・事前評価シートを受け取った担当者は、教員・講師からの講評・アドバイス欄に記入したのち、一部のコピーを残して、原本を次週の授業で返却する。（例）自分で意識して行動すれば、きっと力がつきますよ。

◇中間評価シート

・中間報告の前週に、中間評価シートを、記入方法が例示してある経済産業省の様式（経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』、45 頁。）のコピーを付して学生に配布する。

・学生は、記入方法の例示にしたがって中間評価シートの学生本人記入欄に記入して、１週間後の授業で担当者に手渡す。

・チーム担当者の記入完了後、１部コピーを残し、速やかに原本を学生に返却する。返却に当たっては、口頭でコメントしながら、学生のモチベーションを高める配慮をする。

（例）社会人基礎力を育成するには、例えば次のように、何事もプラスに変換し、「褒める」ことが大切である。

・返却時の口頭によるコメント：自分の意見を主張すらできなかったのに、自分の意見を主張できるようになったことを強調し、褒める。

○学生が記載に慣れるための工夫

予め、事例を示しておく。今回は初めての試みなので、経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』(28～31 頁）を活用した。

授業開始時にゴールセッティングシート（巻末資料２－①）を配布し、それに、その時間の行動目標を記入する。そして、終了時に振り返り（巻末資料２－②）を行い、その結果をゴールセッティングシートに記入する。上記事例を頭に置いて、これを毎時間繰り返すことにより、自己評価にも慣れ、自身の行動を振り返り、文章化する力も向上する。

③活動記録シート

○様式

このような評価は初めての経験であり、今回は、経済産業省の様式（経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』、44 頁。）をそのまま用いることにした（巻末資料９）。

○記載の流れ及び記載要領、フィードバックの方法（タイミング・内容）

活動記録シートは期間中次の２回提出させ、担当教員がコメントを付して次週に返却した。

・第１回目：全 20 講中第８講目（平成 20 年 10 月 30 日）

・第２回目：全 20 講中第 14 講目（平成 20 年 11 月 27 日）

担当教員は、学生本人が記入したシートを注意深くみて、プラス志向のコメントを記して返す（シート上に、誰が何を記入するかについては巻末資料９参照)。

（例）力を発揮できたシーンを記憶にとどめ、そのシーンを常に意識しておれば、きっと本物になりますよ。

○学生が記載に慣れるための工夫

予め、事例を示しておく。今回は初めての試みなので、経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』(28～31 頁）を活用した。

授業開始時にゴールセッティングシート（巻末資料２－①）を配布し、それに、その時間の行動目標を記入する。そして、終了時に振り返り（巻末資料２－②）を行い、その結果をゴールセッティングシートに記入する。上記事例を頭に置いて、これを毎時間繰り返すことにより、自己評価にも慣れ、自身の行動を振り返り、文章化する力も向上する。

３．授業や活動の具体的記録

	授業等内容
月日： 10 月 9 日(木) 時限： 1 形態： 全体 場所： 5229 演習室	クラス別授業 **事前の適性検査を実施** 10 月 16 日から開始される授業に先立ち事前の適性検査を実施した。同検査は社会人基礎力評価システムの一環として、検査による客観的評価の導入を図るためのもので、社会人基礎力のうち、目に見える行動としての「シンキング」の奥にあって、目に見えない「頭の働かせ方」や目に見える行動としての「アクション」と「チームワーク」を支えている目に見えない「精神的タフネス」を客観的に検査(いずれも適性科学研究センター)するものである。来年 1 月には事後検査も実施することになっており、上記能力の事前と事後との測定値を比較して教育効果を測定する。このような内面の客観的検査を学生にフィードバックすることにより、自己評価と客観的評価とが噛み合って相乗効果を生み「社会人基礎力」のスパイラル的向上を期待している。
月日： 10 月 12 日(日) 時限： 1～4 形態： 全体 場所： 5229 演習室	**ファーストミーティングとマインドマップ研修の実施** 日常の授業から解放された日曜日の終日、ファーストミーティングとマインドマップ研修を実施した。ファーストミーティングでは、担当教員やスタッフ紹介の後、ヘッド教員の後藤文彦経営学部教授から、今回の「二段階方式実践的PBL型教育」を通じて、学生諸君が「社会人基礎力」の必要性を認識し、自ら「社会人基礎力」を向上させることによって、将来はフォロワーとしても、リーダーとしても、社会で役立つ人材になってほしい、と挨拶があった。マインドマップは、発想を広げる拡散思考と結論を導き出す収束思考が一枚の紙の上で可能になるもので、思考回路を活性化させ、社会人基礎力にある「考え抜く力」を実践する方法として今回の研修に採用した。研修では、手順説明やウオーミングアップを経て、実践が行なわれた。実践編の 1 年次生には“卒業までの大学生活を描いてみよう”、2･3 年次生には“5 年後の自分を描いてみよう”というテーマのもとに研修が進められた。
月日： 10 月 16 日(木) 時限： 1 形態： ｸﾗｽ別 場所： 5 号館各演習室	**「二段階方式実践的ＰＢＬ型授業」の開始** 課題説明課題解決力実践「二段階方式実践的PBL型授業」が始まった。当日は、課題提供企業の方々も出席いただき、課題の趣旨説明が行なわれた。受講生は、1 年次生 9 名、2 年次生 9 名、3 年次生 10 名の計 28 名で、在籍学部も経済学部、経営学部、法学部、外国語学部と多彩なものとなった。クラスは、1 年次生 1 クラス、2～3 年次生は、企業からの提供課題ごとに 3 クラスに分れ、 計 4 クラス編成となった。「二段階方式実践的PBL型」授業は、1～3 年次生の特性に応じて、目標を二段階にブレークダウンしており、第一段階(1 年次生対象)では、企業とは連携せず、明確なキャリア意識を持たせ、内面から支えられた社会人基礎力の向上にウエイトを置いている。2～3 年次生の第二段階で、産学連携による実践型学習プログラムにより、フォロワーシップとリーダーシップに関連する社会人基礎力の養成を目指している。企業とは連携しない 1 年次生は、キャリアインタビューを中心に授業が進められていく。2～3 年次生は、企業からの提供課題ごとに 3 クラスに分れ、学生各自から自己紹介と当該課題を志望した動機が述べられた。次いで、企業からは、提供課題の趣旨説明と学生との質疑応答が行なわれ、初日の授業を終えた。なお、企業からの提供課題は次のとおり。 ○日本アイ･ビー･エム株式会社　「5 年後の大学生活はどのように変わっているべきで、それに対して IBM としてどのような提案･サービスを提供すべきか？」 ○小林工芸株式会社　「新商品をブランドにもっていくための戦略と実践」 ○株式会社ベネッセコーポレーション　「「社会人基礎力」を身につけるプログラム開発」
月日： 10 月 23 日(木) 時限： 1 形態： ｸﾗｽ別 場所： 5 号館各演習室	【PBL 実践Ⅰ】 ･学生による朝のアイスブレイク(「あとだしジャンケン」) ･授業のゴールイメージの共有 ･インタビュー体験(良い例と悪い例の比較検討) ･キャリアワーク(バリューカードの実施及び傾聴練習)
月日： 10 月 30 日(木) 時限： 1 形態： 全体/ｸﾗｽ別 場所： 5229 演習室他	**全体授業　適性検査のフィードバック** クラス授業に先立ち、10 月 9 日に実施された「頭の働かせ方」と「精神的タフネス」とに関する検査結果を受講生全員にフィードバック。「頭の働かせ方」は社会人基礎力のシンキングと対応している。また、「精神的タフネス」は、同じく、アクションとチームワークとに対応している。検査結果の解釈の仕方と活用方法とについて解説したのち、受講生の平均的姿が示された。 クラス別授業 【PBL 実践Ⅰ】 ・学生による朝のアイスブレイク（「あとだしジャンケン」） ・キャリアインタビュー企画書作成第 1 弾（インタビューしてみたい人をできるだけ多く書き出す） ・本日の振り返り

	授 業 等 内 容
月日： 11 月 4 日(火) 時限： 3・4 形態： ｸﾗｽ別 場所： 5 号館各演習室	クラス別授業 【PBL 実践Ⅰ】 ・学生によるアイスブレイク（「協調グーパー」） ・10 月分活動記録シート記入 ・インターネット職業探索（JOB JOB WORLD） ・キャリアインタビューの進め方レクチャー（社会人マナー、名刺交換） ・インタビュー企画書作成 第 2 弾 ・本日の振り返り
月日： 11 月 6 日(木) 時限： 1 形態： ｸﾗｽ別 場所： 5 号館各演習室	クラス別授業 【PBL 実践Ⅰ】 ・学生によるアイスブレイク（「2 拍子・3 拍子」） ・本日のゴールセッティングシート記入 ・今後の進め方について ・キャリアインタビュー企画案発表 ・本日の振り返り
月日： 11 月 13 日(木) 時限： 1 形態： ｸﾗｽ別 場所： 5 号館各演習室	クラス別授業 【PBL 実践Ⅰ】 ・学生によるアイスブレイク（「タイ・タコ」） ・本日のゴールセッティングシート記入 ＜学生による授業運営＞ ・パワーポイント基礎演習 ・キャリアインタビュー進捗状況発表 ・本日の振り返り
月日： 11 月 20 日(木) 時限： 1 形態： ｸﾗｽ別 場所： 5 号館各演習室	**経済産業省近畿経済産業局　事業見学に来学** 10 月 23 日から始まったチーム別授業も 7 回目を数える 11 月 20 日、近畿経済産業局関係者の方々が事業見学のため来学された。午前 9 時に授業開始、まず最初は、企業とは連携しないＰＢＬ実践Ⅰの授業を参観、次いでベネッセクラスを参観された。当日のベネッセクラスは中間発表日であることから、企業側から担当者も出席されていた。ベネッセコーポレーションから与えられた課題『社会人基礎力を身につけるプログラム開発』についての取り組み状況を学生各自が発表した。この学生の発表に対して、企業担当者から様々なアドバイスをいただき、最終報告会へ向けて引き続き、取り組みが続けられることになる。その後は、日本 IBM クラス、小林工芸クラスの授業を参観いただいた。授業終了後は、近畿経済産業局関係者と本学の授業スタッフとの意見交換が行なわれた。 クラス別授業 【PBL 実践Ⅰ】 ・学生によるアイスブレイク（「だるまさん」） ・本日のゴールセッティングシート記入 ＜学生による授業運営＞ ・キャリアインタビュー進捗状況発表 ・チーム別ディスカッション ・本日の振り返り
月日： 11 月 27 日(木) 時限： 1 形態： ｸﾗｽ別 場所： 5 号館各演習室	クラス別授業 【PBL 実践Ⅰ】 ・本日のゴールセッティングシート記入 ・中間プレゼンテーション（PBLⅡ・Ⅲに協力いただきこれまでの取組経過を発表） ＜学生による授業運営＞ ・プレゼンテーション振り返り、反省会 ・本日の振り返り

	授 業 等 内 容
月日： 12 月 4 日(木) 時限： 1 形態： ｸﾗｽ別 場所： 5 号館各演習室	**社会人基礎力育成・評価システム構築事業の視察・インタビュー　実施** 経済産業省から「社会人基礎力育成・評価に関する実践事例の調査研究」の委託を受けたＬ株式会社が、視察・インタビューのため来学された。当日は、企業とは連携しない PBL 実践Ｉの授業を視察、次いでベネッセクラス、日本 IBM クラス、そして当日が中間発表日である小林工芸クラスの授業を視察いただいた。授業終了後は、本学の授業担当スタッフに対し、社会人基礎力育成カリキュラムの具体的な取り組み内容や評価への取り組み等について、インタビューが実施された。授業担当スタッフからは、中間評価時点までの活動状況や社会人基礎力育成･評価の取り組みを学内に広げるための活動状況についての現況と課題が述べられた。最後は受講学生への聞き取りが行われ視察を終了した。
	クラス別授業 【PBL 実践Ｉ】 ・学生によるアイスブレイク ・本日のゴールセッティングシート記入 ＜学生による授業運営＞ ・キャリアインタビュー進捗状況報告 ・本日の振り返り
月日： 12 月 11 日(木) 時限： 1 形態： 全体 場所： 5229 演習室	**プレゼンテーション講習会の実施** 全体授業（プレゼンテーション講習）学内における「ＰＢＬ最終報告会」を 1 ヶ月後に控えた 12 月 11 日、株式会社 KS から講師をお招きして、4 クラス合同のプレゼンテーション講習会を実施した。「ＰＢＬ最終報告会」での各クラスからの発表では、自らのチームが、どのような活動に取り組み、どのような行動を通じて、どのような成果を上げ、その過程でどのようなことができるようになったか、について発表を行う予定であるが、これらの内容をより効果的に伝えるためには、資料作成の方法や話し方の技術もプレゼンテーションの大きなポイントになることはいうまでもない。このことから、プレゼンテーション成功のポイントを、好感度を高める印象づくり、プレゼンテーションにおける話し方・言葉づかい、論理的な考え方と伝え方、の各項目に分け解説いただいたうえで、実地指導を受けた。プレゼンテーションを行う機会は、大学卒業後の進路を問わず多くあり、大学在学中にプレゼンテーション能力を養っておくことは非常に有意義であることから学生は熱心に聴講していた。
月日： 12 月 18 日(木) 時限： 1 形態： ｸﾗｽ別 場所： 5 号館各演習室	**第三者評価委員・普及推進委員による授業参観の実施** 第三者評価委員・普及推進委員から、夏目孝吉氏（文化放送キャリアパートナーズ）と西村善和氏（京都経営者協会）が来学、各クラスの授業を参観された。授業終了後は、夏目氏、西村氏両名と、本学 PBL 授業担当教員との意見交換会が行なわれ、各クラスの担当教員からは、これまでの授業での取り組みと報告会にむけての目標について説明があった。夏目氏、西村氏からは、社会人インタビューやチーム運営、成果の記録、またテーマ設定や学生の成長などについてアドバイスがあった。ヘッド教員の後藤経営学部教授からは、社会人基礎力の学内の普及活動として、12 月 16 日にシラバス調査分析結果報告会を開催したこと、また、21 年度には、京都商工会議所と共催し、社会人基礎力を育成する新入社員研修プログラムを実施予定であることが報告され､社会人基礎力の普及推進活動についての本学の取り組みが説明された。最後に、1 月 15 日に実施する最終報告会と 2 月 7 日キャンパスプラザで開催を予定している「ＰＢＬ教育の成果報告会＆今後の可能性」についての概要説明が行なわれた後、意見交換会を終了した。
	クラス別授業 【PBL 実践Ｉ】 ・最終報告会のプレゼンテーション内容についてディスカッション ・次回授業（1/8）までのスケジューリング
月日： 1 月 8 日(木) 時限： 1 形態： ｸﾗｽ別 場所： 5 号館各演習室	クラス別授業 【PBL 実践Ｉ】 ・最終報告会のプレゼンテーション準備 ・役割分担確認等

	授 業 等 内 容
月日： 1 月 15 日(木) 時限： 1 形態： 全体 場所： 5229 演習室	**ＰＢＬ実践最終報告会の開催** 平成 20 年度経済産業省「体系的な社会人基礎力育成・評価システム構築事業」のモデル大学として採択された「二段階方式実践的 PBL 型教育」は、昨年 10 月 9 日の適性検査を皮切りに、マインドマップ研修や企業からの課題説明、プレゼン講習、フィールドワーク、中間報告会及びチーム別授業を積み重ね、平成 21 年 1 月 15 日（木）ＰＢＬ最終報告会を開催した。 ＰＢＬ最終報告会では、各チームから「どのような活動に取り組み、どのように成長できたか」についての発表（プレゼンテーション）を行い、そして、審査委員から、学生たちの社会人基礎力の成長や知識の深まり等を審査いただいた。審査委員には、ＰＢＬ教育事業の推進委員である就職情報研究所 夏目様、京都商工会議所 佐藤様、京都経営者協会 西村様の３名にお願いした。 各チームからの発表時間、内容及び審査基準は、経済産業省主催の「社会人基礎力育成グランプリ」の内容に準拠して実施。１年次生１クラス、企業からの提供課題ごとに分れた３クラスの合計 4 クラスが、どのような活動に取り組み、どのような行動を通じて、その過程でどのようなことができるようになったか、をパワーポイントを使って発表した。 各チームからの発表後、審査委員が評価項目ごとに７点満点で採点、合計点が最も高かった小林工芸クラスが“優秀賞”に、次いで高かった日本ＩＢＭクラスが“準優秀賞”に選ばれ、審査委員長の夏目様から表彰された。 また、“優秀賞”の小林工芸クラスと“準優秀賞”に選ばれた日本ＩＢＭクラスの２チームは、2 月 7 日(土)キャンパスプラザ京都で開催される「ＰＢＬ教育の成果報告会」に出場。さらに、“優秀賞”の小林工芸クラスが、2 月 10 日東京で開催される「社会人基礎力育成グランプリ」(主催：経済産業省)へ出場することになった。 なお、出場チーム（クラス）及び提供課題は次のとおりであった。 【PBL 実践Ⅰ】9 名 企業とは連携しない実践型学習を行った 1 年次生のみのクラス。 社会人に対するインタビュー(キャリアインタビュー)を通じて、社会人基礎力の涵養を目指すとともに、 さまざまな職業や働き方を自らの目で確かめる。 【PBL 実践ⅡⅢ 日本 IBM クラス】5 名 日本アイビーエム株式会社からの提供課題 「5 年後の大学生活はどのように変わっているべきで、それに対して IBM としてどのような 提案・サービスを提供すべきか？」 【PBL 実践ⅡⅢ 小林工芸クラス】6 名 小林工芸株式会社からの提供課題 「新商品をブランドにもっていくための戦略と実践」 【PBL 実践ⅡⅢ ベネッセクラス】8 名 株式会社ベネッセコーポレーションからの提供課題 「「社会人基礎力」を身につけるプログラム開発」 PBL最終報告会終了後は、第二回社会人基礎力推進全体会議を開催した。同会議は、本事業についての全体理解を深めるとともに、協力体制の推進を目指して開催するもので、課題提供企業関係者や普及推進委員の就職情報研究所 夏目様、京都商工会議所 佐藤様、京都経営者協会 西村様や本学のキャリア教育研究センタースタッフ関係者が出席した。会議では、今後の展開や課題等について意見交換を行い、相互理解を深めることができた。

４．学内における学生の成果報告

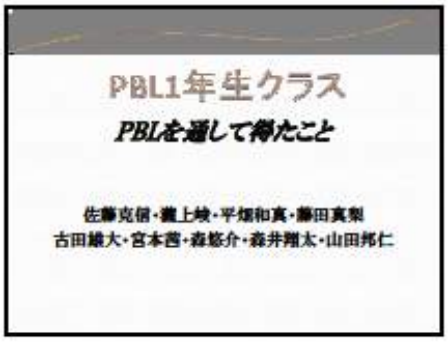
授業最終日の 1 月 15 日には「PBL 実践 最終報告会」を開催し、各クラス代表による 20 分間のプレゼンテーションが行われた。

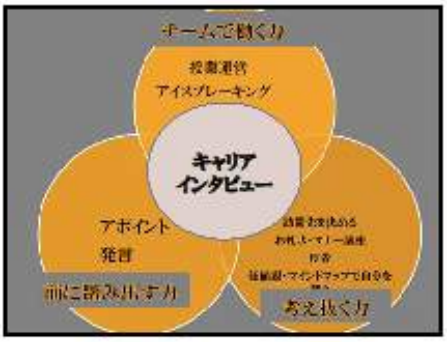
当日は 2 月に東京で開催される「社会人基礎力育成グランプリ 2009～予選大会～」への出場チームの選考会も兼ねており、本番さながらの審査を交えた報告会となった。

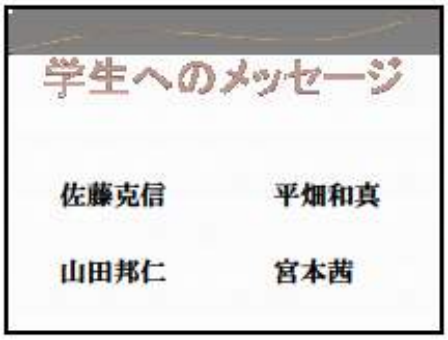
1年次生クラス

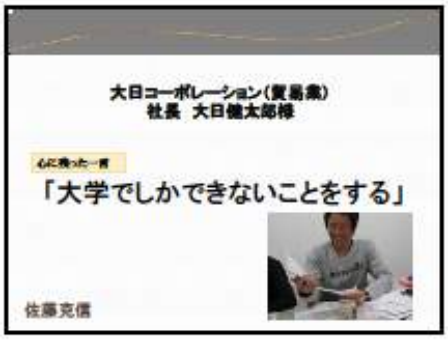
＜課題＞

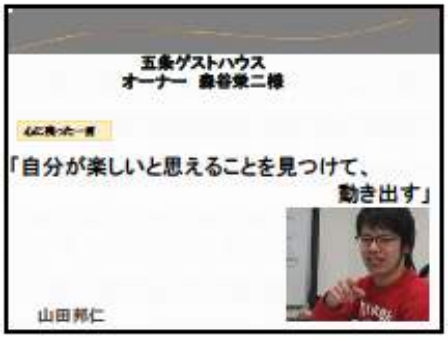
「自分の関心のある職業に就いている社会人に
インタビューを行う」











株式会社ワコール（下着メーカー）
商品企画一課　中島千春様

心に残った一言

「社会人には自由な時間はない」

宮本茜

プロフェッショナルとして

瀧上峻　　古田雄大

藤田真梨　　森井翔太

京都銀行
伏見支店長　畑中伸夫様

心に残った一言

「人の上に立つ人間だからこそ、自分を律する」

瀧上峻

京都ホテルオークラ
宿泊・フロント係　濱田知輝様

心に残った一言

「理不尽な要求があっても、笑顔で応対する」

藤田真梨

京都株式会社設立サポート
行政書士　井上聡様

心に残った一言

「人と人とのつながり大事だよ」

古田雄大

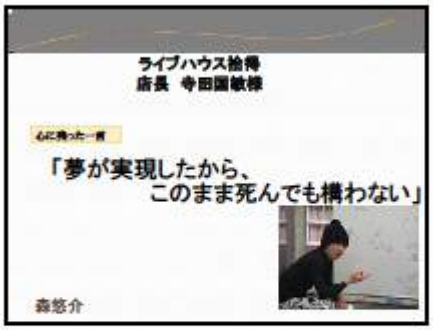
KAPITAL京都（洋服屋）
店長　林由香利様

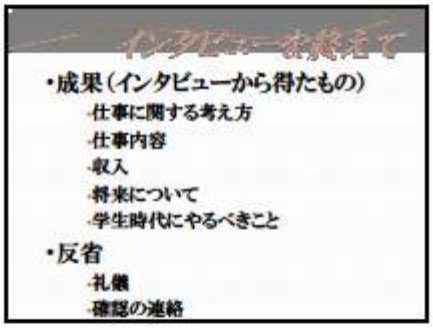
心に残った一言

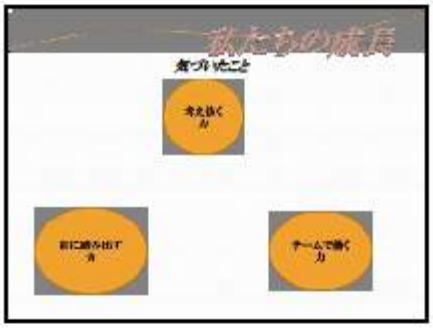
「仕事には優先順位がある」

森井翔太

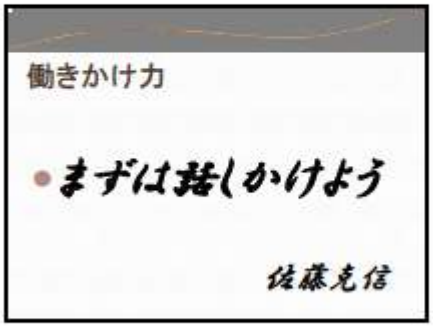
仕事と夢
森悠介


ライブハウス拾得
店長　寺田園敏様
心に残った一言
「夢が実現したから、
このまま死んでも構わない」
森悠介


インタビューを終えて
・成果（インタビューから得たもの）
-仕事に関する考え方
-仕事内容
-収入
-将来について
-学生時代にやるべきこと
・反省
-礼儀
-確認の連絡


私たちの成長
身づけたこと
考え抜く力
前に踏み出す力
チームで動く力

私たちの成長
身づけたこと
考え抜く力
行動
前に踏み出す力
働きかけ
チームの実行力
チームで動く力


働きかけ力
●まずは話しかけよう
佐藤克信

実行力

- 一歩踏み出して
  見えてくる世界

山田邦仁

課題発見力

- 反省からの気づき

宮本茜

創造力

- 制度の破壊と再構築

森悠介

規律性

- 規律なくして仕事なし

瀧上峻

協調性

- One for All
  All for One

平畑和真

規律性

- 守って生まれる信頼関係

藤田真梨

傾聴力

- 言葉ではなく
  ココロに耳をすませば

古田雄大

傾聴力

- 聴くことによって広がる
  無限の可能性

森井翔太